
東方和想白魔

鍔姫 水霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方和想白魔

【NZコード】

N6799V

【作者名】

鍔姫 水霧

【あらすじ】

白いしろい、一つの部屋。そこに居た少年は一人でした。人を見たことは、産まれてから三年間しかありません。それから何年間か分かりませんが、ずっと一人なのでした。ある日、少年の目に一人の少女が映りました。或いは映ったと思い込んだだけだったかもしませんが、穢れの無い綺麗な少女でした。 いつからか、少年の目には少女しか映らなくなりました。少女はいつでも笑っていました。少女は最後に初めて、少年に話し掛けました。「連れていくてあげる あなたの望む場所へ」少年

は答えました。 「君と同じ場所へ」

〇〇・白夜に悪魔は目覚める（前書き）

どうも 鎧姫水霧です。

拙文ですが、暇潰しにでも読んで頂ければ幸いです。

〇〇・日を夜に悪魔は目覚める

「これは何処だ?

何も見えない

自身の息の音は、辛うじて聞こえる

それも直に聞こえなくなつた

感じじるものは何も無い

身体は確かに在る

記憶と呼べるものはない

だが知識は在る

．．．．頭が痛い

目蓋越しの視界が白がかつて來た

どうやら僕は眠っていたらしい

目蓋を開いた先に広がる世界を想像してみる

光に満ちた楽園か

闇に墮ちた落園か

それとも闇光入り雑じつた混沌か

意味の無い想像だ

だが、この日の蓋を開くのはまだ早い

と言つよつ、まだ「うして」いたい

世界を見るのが、今は未だ恐ろしい

記憶が無いのだ

しかもそれを直覚している

知らぬ世界に身を投じられる程、僕の心は強く無い

願わくは永遠に眠りの中、想像とも妄想ともつかぬ世界に沈みたい

光が強くなり、僕の頭を撫でた

じつやう限界ひけい

少しずつ、田蓋を開いてゆく

あの光は月のものだつた様だ

やわら
和かな紅い月光

そんな光に見守られながら、僕は目覚めた

〇〇・白夜に悪魔は目覚める（後書き）

感想等よろしくお願ひいたします。

更新ペースは出来るだけ安定させるつもりですが、大きく乱れてしまつたら申し訳ありません。

01・黒き刃は白を語る（前書き）

どうも水霧です。

最近は広島の加計という町に自然を感じに行っていました（笑）
駄文 を投下しましたので暇つぶしにでも。

よく見れば、月は白かった。

ただ、一人の少女が、血を幾重にも塗りたくつた様な紅黒い色の傘を、僕の上に差していた。天気雨だったのだ。

その少女は、泣いていた。

どれだけ泣いていたのかは分からぬ。一日前からか、一年前からか、或いはそれより前からか……。

雨は止みそうになく、少女も泣き止みそうに無い。

座り込み下を向いたまま、渴れ果てた涙の代わりに、赤より紅い血の涙を、ただ流し続けている。

雨で薄まつた血液で水溜まりが出来ていて、その中心に僕は眠っていた。

僕が眠り始めた時から、彼女は泣いていたのかも知れない。

僕は上半身を起こし、少女に尋ねた。

「何で、泣いているの？」

黒いドレスの少女は、目を見開いた。

起きた僕を一度見て、目を擦り、黒い瞳をもつ一度僕に向けた。

「レフィルカ様…………！」

どうやら、僕は『レフィルカ』と言つ名前らしい。

高い声、白い長髪、純白のゴシックロリータ。よく考えなくとも女なので、僕と言つ一人称はえた方が良いかも知れない。

「僕、いや私は、いつから眠つてた？ それと私の名前、あと種族は？」

兎に角取り敢えず、最初にこの質問をしておかないといけない。

何よりも自分が何者かを把握する事が最優先だ。少なくとも人間では無い事は分かつている。何故ならこめかみの上辺りから細長く硬く鋭い一対の突起体…………おそらく角、背中から蝙蝠のそれに酷似した白い翼、腰辺りから先端部分が槍の形をした細長く白い二本の尻尾が生えているのだ。この時点で僕の『常識』とは大きくかけ離れている。

僕の中にある『知識』の中から考えてみたが、鬼には翼や尻尾は無く、悪魔には角は無い。この二つの融合した『何か』かも知れない。

「あなたはレフィルカ・アマキール。一万年は眠っていました。種族は悪魔ですが……その角はある鬼の物です」

少女は目元の血を拭い、僕が弄っていた角を見て言った。

一万年なんて気が遠くなるような年月を眠っていたのか。信じられる話では無いが、彼女が嘘を吐いているようには見えないので事実なのだろう。

それにある鬼…………か。訳有りな感じだが、角に違和感は感じられない。むしろ違和感が無い方がおかしい筈なのだが。角だけでは無く、翼や尻尾もだ。

そして、レフィルカ・アマキール…………何か大きな意味がある気がする。自分の名前なので、意味があるのなら知つておきたい。

い。

「じゃあ一つ目の質問。その鬼はどんな人だった?」

「本当に、忘れてしまつたんですね…………」

「？」

「…………いえ、何でもありません」

忘れてしまつた、という事は、一万年前に何かがあつたのだろう。これは聞かなくて良い。僕は悪魔でも僕であり、過去を押し付けられても鬱陶しいしどうしようも無いのだ。解決できない事まで聞く必要は無い。それが過去の事なら尚更だ。

「彼女の名は、討霸伐那。^{うつはきりな}一本の長槍を操る鬼で、レフィル力様の親友でした」

「…………伐那の角が僕にある理由を教えて」

「…………彼女は、死にかけていたレフィル力様を生かす為に、レフィル力様と『同じ存在』になりました。ちなみに尻尾もそれに影響された形狀です。既に完全に『調和』しているので、彼女の意識はもう存在しません」

同じ存在になった？ 僕が死にかけていて、それを生かす為に？

…………分からぬ事が多すぎる。特に『調和』という部分は何となくのイメージすら掴めない。力が何かを僕に全て渡したという事は何となく分かる。

「『調和』している って、どういう事？『同じ存在』になるって いうのも」

「『調和と混沌を操る程度の能力』…………レフィル力・アマキールと言う存在の根源の力です。この『調和』を彼女が強制的に発動させ、既に生死の確認もそれなかつたレフィル力様に腹部に孔を穿たれる重傷を負っていた彼女自身を取り込ませ、同化させ、最終的にレフィル力様自身に『調和』したのです。意識すれば、この能力の存在が分かる筈です」

「僕に、調和した…………」

ならば意識は半分ずつになるとと思うのだが、違うらしい。糲然となりが事実は事実、今は深く追及しない事にする。

胸に手をあて、目を閉じてみると、確かに僕の中にあつた。『調和と混沌操る程度の能力』。そして

「あつたけど、もう一つの 『瞬を操る程度の能力』？」

「やはり在りましたか 伐那の能力です。自身の速度、特に瞬発力を飛躍的に上昇させる事が出来ます。この能力で伐那は『瞬鬼』と呼ばれていたので、それだけ強力な能力です」

速度を操る 強い上に何にでも使えそうな能力だ。僕自身の能力なんて使いどころが分からなければ訳も分からない。ついでか戦うこと前提の『強力』は、嫌な予感しかしない。

「 」一つ目の質問。戦いは頻繁にあるの？

「妖怪と、特に鬼と出会った場合はほぼ間違いない戦いになります。しかしレフィル力様程の力なら、基本的に脅威にはならないでしょう。 悪魔で『基本的に』、ですが」

「つまりは殺される可能性もある、と」

「そういう事になりますね」

少女は真顔で答えた。一万年もの時間泣いていたといふのに既にその名残は無く、血の涙でぐしゃぐしゃになつていた顔も今は綺麗になつてゐる。その顔で言わされたので文句も言えなかつた。

．．．．．三つ目の質問に移ろい。

「三つ目。あなたは何者？」

「私は魔剣テイルヴィングの付喪神、名前はありません」

「テイルヴィング．．．．．！」

置んでいた彼女の傘が、漆黒の剣へと姿を変えた。

．．．．．僕は、神話などについてあまり詳しくは知らない。それでもテイルヴィングなんていう最も有名で強力な魔剣ぐらいは知つてゐる。

「はい。そしてあなたは『元』私の所有者でした」

「元？」

「．．．．．レフィルカ様が永い眠りにつく事になつたあの日、あなたは最後に『誰も死なぬように』と私に願いました。私は願いを叶える事の出来る魔剣なのでその願いを叶えることは出来ましたが、同じく重傷だつた私を含め三人、つまり三つの願いを叶えてしまつたのです」

漆黒の刃を白い指でなぞりながら、彼女は言った。

「三つの願いを『叶えてしまった』。」

「…………嫌な予感がする。確かティルヴィングは、三つの願いを叶えた時に何かが起こる魔剣だった筈だ。」

「それで、三つの願いを叶えたら…………？」

僕は固唾を飲み込んで、彼女…………ティルヴィングに尋ねた。
最悪の答が返ってくることは、何となく予想できていた。

「レフィルカ様、私と戦つて下さい。」

私は願いを三つ叶える代わりに所有者の命を摘む魔剣、ティルヴィング。

伐那の力を得たレフィルカ様でも、本気で来ないと…………死にますよ」

ティルヴィングが言い終わると同時に、死の刃は僕に向けられた

01・黒き刃は白を語る（後書き）

次話はレフィルカとティルヴィングの戦いです。

一話」との文章量はもう少し多い方が良いでしょうか？
それも含め感想等よろしくお願ひします。

02・黒き刃は白を喰る（前書き）

どうも鎧姫です。

サブタレイニアンローズが避けられません。
こゝしかわいいよここし。そして怖いよ。

02・黒き刃は白を刈る

ティルヴィングが此方に切つ先を向ける。

僕は瞬の能力を使い横に飛ぶ。

次の瞬間、避ける前に僕が居た場所の地面は砕け散った。

「 つー！」

「この程度、序の口ですよ」

凶刃が横に振られる。

能力を発動したまま翼で上に飛翔して避ける。

綺麗な扇形に地面が削られ、近くの木々も砕け散った。

「ズルいでしょその威力 」

「レフイル力様も速すぎです。でもここからは話す余裕も無くなり
ます。せめて能力は解かない事を奨めますよ」

言われなくても解くつもりなど無い。

ティルヴィングの攻撃は威力が高過ぎる上に速度もある。

『瞬を操る程度の能力』で避けられているが、もはや当たれば悪魔と言えども致命傷を負つだう。

飛び込み斬りを大きく横に飛んで躲す。

直接当たらなくとも掠り傷が付く程の威力だ。ここは攻勢に転じたい。

自分の武器に成るものを考えていぐ。

角、却下。リーチが短過ぎる。

翼、却下。明らかに攻撃用では無い。

爪、採用。鋭く長く伸びた左右の黒い爪を擦り合わせた。強度も充分だ。

尻尾、言つまでもなく採用。先端が鋭い槍になつていて、自分の手足の様に自由自在に動かせる。伸縮可能であり、最長では少なくとも十メートルある。

魔法と思われる黒い炎をしゃがんで躲し、左の尻尾で反撃する。これは反応して弾かれたが、右の尻尾で頬を掠める事に成功した。

「つー?」

「いひちだよ」

ティルヴィングの前に接近、一瞬の間を置いて背後へ移動する。

彼方も反応してくるので更に頭上へ飛ぶ。

右手の爪に『力』を込めて全力で振り下ろした。

ギヤリイン、と高い金属音が鳴り、親指以外の爪が中間辺りで折れた。

「痛つ…………やっぱ強いね、ティルヴィング」

吹き飛んだ彼女に向かつて話し掛ける。

あれは耐えられなかつたのでは無く、威力を殺す為だろう。その証拠に、彼女には頬に軽い傷しか付いていない。

「貴女様こそ、この一瞬でここまで戦いの感覚を…………

「まだ本気じや無い君に言われたくないね」

「…………そこまで見抜きますか」

「本気だつたら左の尻尾が無くなつてるよ」

折れた爪に『力』を注いで再生させた。俗に言う魔力という奴だ。能力と同じく僕の中に感じられている力で、おそらく魔法も使える。

そしてもう一つ、妖力と言う力も感じる事が出来る。

先程の攻撃はこの妖力で爪自身を強化し、魔力を纏わせた物だ。

一つに大きな違いは見られないが、魔力が紅色で妖力が蒼色である。しかしティルヴィングの魔力は黒いので、個人で違う可能性もある。

「…………どうやら私は、大きな勘違いをしていたようです」

「？」

「記憶を失った程度で、貴女に手加減など必要無いですね」

「ちょっと…………いやいやいや、反則でしょ…………っ
！」

黒の長剣が、更に強く大きな魔力を纏う。

『漆黒』と言つ言葉でも言い表せない『死』が、僕の前に顕現した。

「反則？ まだ『貴女自身の』能力も使つてないのに？」

そして彼女は狂刃を右手から左手に持ち換え、その場で振るつた。

「ディサイドブラック」

瞬間、綺麗な弧の形をした強大な黒が、僕の視界を覆つた

僕は今、最高速度で黒い衝撃波を避け続けている。

左足首から先は無惨にも消え失せており、血は止まらない。

「うつ・・・・・」

ティルヴィングは言葉を発する事無く、攻撃を続けてくる。魔力で止血し、更に形だけは元に戻した。

馴れるまではまともに動きそうに無いので、使わない事にする。

それより、あれを止める方法を考えないとまずい。

剣を振つただけで必殺とも言える魔力の衝撃波を撃つてくる。

右翼の先端が消滅した。

痛みはほぼ無い。翼などの痛覚は最低限しか無いらしい。僅かな魔力で完全に再生したので、盾としても使えそうだ。

「考え方ですか？ 隨分余裕ですね」

「そう見えるつ・・・・・の？」

速度の高い衝撃波を大きく避ける。

やはり吹き飛ばされそうになるが耐えて、次の物を避ける。

下に飛び左に飛び上に飛び前に飛び

埒が明かない。

駄目元で魔力を右手の人差し指の先に集め、光線をイメージして放つた。

すると太さ約1メートルの紅い光線が発射された。

黒い衝撃波に焼き消されたが、あちらも威力が弱まっている。

「そう見えますね」

「ああそつかい」

妖力と魔力で全身を強化し、速度と瞬発力を最大にする。

一瞬でテイルヴィンゲの背後に回り込み、飛び蹴りを背中にあてた。

後ろ向きに衝撃波を放つて来たが翼を身代わりにして躰す。再生するとの同時に妖力を左手、魔力を右手に集める。

右腕を左手で掴んだ状態で突き出し、二つの力による光線を放った。

…………しかし妖力と魔力が拒み合い爆発、右腕が消し飛んだ。

「うああッー！」

「恨喰黒檻」
いそじきくろのつ

黒い柱状の魔力が均等に大量に並び、四方を覆う。
更に上下には蓋がされ、右腕を再生していた僕を完全に捉えた。
全ての辺が約一メートルの立方体、側面は網状だ。

「…………」

「…………終わりですね。」

この「恨喰黒檻」は、私が柱の間に剣を刺すと、全ての柱間から同じ物が出現します。ティル・ヴィングの刀身は112cm、つまり深く突き刺せば終わりです」

それで網状だったのか。

…………まずい。このままでは本当に殺される。

檻を破壊しようとしても傷すら付かない。

穴から光線を撃つが難なく弾かれる。

尻尾で攻撃しても同じく弾かれる。

外に魔力を集めようとすると檻の魔力が妨害する。

黒い刃が檻の網目を通り抜け、少しづつ近付いてくる。

万事休す いや！！

最後に『調和と混沌操る程度の能力』、これに賭けるしか無いだ
ろう。

何となくだが使い方を思い出した。

そして、伐那とテイルヴィングと過ごした、大切な記憶も

檻の魔力を空氣と『調和』させた。

すると魔力は形を保てなくなり、霧散した。

「な !?」

「 こんな戦い、終わりにしよう」

右腕に妖力と魔力を集めて調和させ、暴走を抑えた。
更に射出すると同時に、調和した二つを『混沌』させる

混沌と化した妖力と魔力は激しく反発し合い、壊滅的な破壊力を産む

【巨大な紫色】の光線が、空気の張り裂ける様な轟音と共に放たれた

02・黒き刃は白を刈る（後書き）

- ・調和

あらゆるもののが自他を傷付ける事無く存在する状態

- ・混沌

存在や非存在に関わらず何も交わる事の無い状態

大体こんな感じですね。混じる混ざらないで考えてほぼ大丈夫です。
レフィルカのイラストを投稿する可能性もあつたり無かつたり

03・遠い過去の記憶 -サンаторウム-（前書き）

いつもお久し振りです。 鶴姫水霧です。

更新が遅くなつたのは殆どオリジナル小説の方を書いていた為です。
リフレクトファンタズムと言つタイトルです。

「おひこつち書けよ」と友人に言われました。
そう思つた方は下の一言からどうぞ。

03・遠い過去の記憶 -サントリウム-

「おーい、生きてる？」

「貴女が加減したお陰で、掠り傷だけですよ」

ティルヴィングを傘に戻し、此方に歩いてくる白い悪魔に言った。

「良かつた。何とか上手く加減できたよ」

「全く……本当に記憶は無いんですか？」

あの能力は、記憶を失つて使い方も分からぬ状態で扱える様な代物では無い。レフィルカ様と伐那と私で協力し、五百年間以上練習し続けてやつと扱える様になつたのだ。

一部でも記憶を取り戻したに違いない。

あの記憶の無い者に、あの努力を知らぬ者に使えてたまるか！！

「思い出したよティルヴィング……いや、ルヴィ」

「…………レフイ様」

ルヴィ…………一万年前の、私の呼び名だ

良かった…………思い出してくれた…………

大粒の、この一万年に流した物とは違つ涙が溢れて来る。

「おつと……」

「…………レフイ様…………」

今だけは、レフィ様の胸で泣かせてもらつていいだろう。

僕は、人間だつた。

・・・・遠い昔の事だ。

伐那とルヴィと出会つた時には、既に僕は妖魔になつていた。

白くて薄暗い部屋に、僕は居た。

食べ物はあった。ベッドもあった。本もあった。

テレビも、ゲーム機も、パソコンも、ピアノも、何でもあそこにはあつた。

決まった時間には広い庭で遊ぶこともできた。

小さかつたが、暑いときにはプールで泳ぐこともできた。

ただ、僕は、一人だった。

三歳の頃だつただろうか・・・・。僕は両親に連れられて、白い部屋と逢つた。

この時、既に僕は一人になつていたのだろう。

その時の両親の表情は、薄黒い靄が掛かつていて思い出せない。
多分・・・・。多分、笑っていた。微笑んでいた。幸せそ
うに・・・・。

想つことは、何も無かつた。

ある日、僕は一人では無くなつた。

目を閉じればいつでも、一人の少女がこちらを見て笑っていた。
穢れというものを知らない、どこまでも純粹な笑顔だつた。

僕は目を奪られた。

眠る様に目を閉ざして、いつも彼女の事を見ていた。
そしてそのまま眠りに就いて、彼女の夢をみていた。

少女はいつでも、笑っていた。

言葉を発する事は、最後に一回しか無かつた。

「連れていくてあげる あなたの望む場所へ」

僕は、迷う事は無かつた。

。 ただ一つだけ叶うなら、何処へでも行こうと思つたのだった

「君と同じ場所へ

この身体は彼女の物だ

今の僕に、怖れる物は無かつた。

彼女と一緒になり、仲間まで出来たのだ。

何不自由なく過ごせる部屋だったが、今の僕には仲間が居る。

伐那は僕の中で生きている。

あの時よりも強く僕に渴を入れてくれる、僕の存在の一部だ。

籠の中の鳥が、大空へと羽ばたく様な気分だった。

僕の胸の中で泣いていたルヴィも泣き止み、笑顔で僕に言った。

「宛てはありませんが、行きましょう!」

僕はとびきりの笑顔で頷いた

03・遠い過去の記憶 -サンナトロウム-（後書き）

あえて短めです。文章量を増やせなくて誤魔化した訳では無いです。

感想等よろしくお願ひします。

ああ妖夢だとグセフラッ シュ避けられない！-

04・古き知識と異なる進化（前書き）

いつも鎧姫水霧です。 こんばんわ。

04・古き知識と異なる進化

「…………何これ？」

「分かりません」

ルヴィはキッパリと答えた。

一万年間眠っていた深い竹林を抜け、約一時間歩いた所だった。
天を貫くビル群…………摩天楼が、不自然なほどに一部分に出来ていたのだ。

確か、僕が今居るのは、白い部屋に居たときよりも過去の世界である。

一万年前には人間らしい人間すら居なかつた。
本で得た知識からして、少なくとも十万年は昔だつた。

…………明らかに早過ぎる。あり得るはずがない。

「ちよっと、行ってみようか？」

「そうですね…………レフイ様なら何か分かるかも知れません」

僕達、妖魔と魔剣は、おそらく人間が住んでいる街へと歩いて行った。

…………僕はすぐに、自身のこの一言を思つ出さうことになつた

「妖怪！？ 妖怪だ、撃ち殺せ！－！」

「ぐつ・・・・・」

「え、ちょっと・・・・・」

『僕達、妖魔と魔剣』・・・・・ 何で気付かなかつたんだ僕の馬鹿。

ルヴィは兎も角、角と翼と尻尾付きの僕は人外丸出しである。

・・・・・ それにしても、妖怪は一般的に実在すると認識している様だ。

一人でやたらテンション上げてるこのおっさんのみが例外だとは考えにくい。

もしかしたら、僕は過去では無く異世界にやってきたのかも知れない。

まあ彼女と一緒にから割とビリでも良いのだが。

「しかし・・・・・ まさかのレーザー銃」

「光速でも、手の動きを見れば簡単に避けられますがね」

その通り、身体能力は所詮人間なのだ。

それに『瞬を操る程度の能力』は、瞬間最高速度では光速並みである。

．．．．．光速並みと言うのは多少盛つたが、手の動きを観て避けるのは容易い。

ちなみに、光速の物体は物理的に無限のエネルギーを持つ、と言うのは嘘だ。

実際はニコートリノの方が速い上、これには僅かだが質量がある。

魔力と調和能力で全身をコーティングすればソニックブームも出ない。

基本的に『調和と混沌操る程度の能力』は万能である。

「悪いね、少し眠つて」

混沌能力を付加した魔力を僅かに右手に纏い、人間の首筋に触れた。こうすることで意識を沈めることが出来る。強い相手には効かない

けど。

「…………そしてどうします？ レフイ様の姿だと襲われますけど？」

「こんな時の調和能力だよ」

角、翼、尻尾を空氣と調和させると、ただの人間の姿になった。ただこれらは存在が強過ぎたのか、少し能力を緩めると角は髪留めに、翼はブレスレットに、尻尾はアンクレットになった。結構お洒落で良いかも知れない。

角の名残のある二つの髪留めでツインテールにし、ルヴィに言った。

「す」「く良くない？」

「可愛い…………ですけど、違つ意味で襲われるかもしれません…………」

「どういつ意味で？」等とふざけて言いながら、街の入り口の門をくぐった

訳が分からぬ。

そして最も驚いたのは、建物などが全て平安風の造りである事だ。木造建築の様でありながら基本的には自動ドアである。走っているのは自走する牛車、空には半透明の巨大な3Dモニター、そして街の中心部分に集中して聳え立つ超高層ビル群

一言で表すなら、未来都市。

「凄い」

「何ですかこれ」

約一時間前の僕と同じ様な台詞を無意識に零すルヴィ。

21世紀を知らない彼女は、僕以上の衝撃を受けた事だろ？

「…………取り敢えず、少し歩いてみよう

「そう…………ですね。きっと何かの間違いでですね」

そう信じたいものだ。しかし見る限り幻術の類では無い。

調和能力はあるゆる妖術や魔術、その中でも特に幻術を無効化できる。

軽く使用しても効果が無いと言つことせ、つまりそれはいつひと言つことであり。

で、少し歩いていると、屋台のおじさんに声を掛けられた。

「お嬢さん、お姉さん、お好み焼き食つてかないかい？」

十中八九、お嬢さんが僕でお姉さんがル・ヴィの事だろ？
文句は無いがやはりル・ヴィの様な…………その…………ない
すばらいには憧れる。

「…………美味しそうですね

「すいません……………今ちょうどお金無くて……………

」

「あひやあー……………そいつまじょーがねえなあ

お金、欲しい。」¹ う思ったのは初めてだ。

「お金？」と首を傾げるルヴィイに「それで交換するんだよ」と説明した。

ルヴィイは頭が良い為、一言で大まかには理解してくれた。

「…………おじわんお願ひ、一切れだけ下せ……」

「おこおこ、」² こんな可愛こお嬢さんにお願いされちゃあ断れねえだ
る「フーー！」

おお…………一切れゼリハガ丸々一^{タダ} 無料でくれた。

「あの、娘いんですか？」

「おまけだよ、遠慮せずに食になつてー！」

…………氣の良い人だ。

僕が「ありがとう」と言つとルヴィイも「ありがとう」³ と答つた。

屋台の隣にあつたテーブルに移動し、一つをルヴィに渡す。

「…………初めて見るものばかりです」

「それは僕も同じだよ。…………見るのはね」

一応小声で付け足した。

ビルや屋台やテーブルなどは本で知っている。ただ、見るのは初めてだ……

この一言はルヴィに聞こえなかつた様で、割り箸の使い方を聞いてきた。

「あの…………これでどうじろと?」

「これはね…………こうして割つて、こう持つて…………」

「

この時間は、何でもない日常の一部の様だった。

04・~~むかし~~知識と異なる進化（後書き）

感想等よろしくお願ひします。

05・不思議な街と一人の少女（前書き）

いつも鍔姫水霧です。

やつと原作キャラです。今とは少し違いますが。

05・不思議な街と一人の少女

「もぐもぐ・・・・・・ 美味しかった」

「ぱくぱく・・・・・・ 美味しかったですね」

そして、食べ終えたら一言。

「「「」」馳走様でした！」」

最低限のマナーは、一万年程前に教えてあるのだ。

「口三箱に割り箸とケースを捨て、ルヴィに話しかける。少し前から気になっていた事である。

「記憶、取り戻したんだけど・・・・・・」

「？…………まだ何か、無い物があるのですか？」

「無い…………か。合つていろよつな、少し違つよつな…………

「所々、抜けてるんだよ。そこのページだけ破り取られたみたいに…………」

「レフイ様もですか…………実は、私も同じなんです」

「やつばつ」

「予想していたんですね、貴女様も」

おそらくこの一万年間、もしくは一万年前に何かがあつたのだろう。今ある限りの情報と記憶から考へると後者の可能性が濃厚である。僕とルヴィと伐那は何者か、或いは『何か』に殺されかけていたのだから…………

「ルヴィは、あのとき僕達が死に掛けていた原因を憶えてる？」

「…………私も、その部分の記憶は残っていないのです…………」

予想通り、記憶から抜けている箇所はおおよそ同じのようだ。

僕は意識が無かつた為、伐那の存在が僕に調和した事自体憶えていない

調和と混沌 十人に聞けば十人が、恐ろしいのは混沌だと答えるだろう。しかし僕は、この場合は、調和の方が怖ろしいと答える。

僕と伐那の例を見れば誰にでも理解出来る筈だ。二つの存在を完全なる一つの存在に変えてしまうのが『調和』で、そこに『混沌』の介入する余地は無い。

. 一つになつた僕と伐那は、もう一度と元には戻れない。

尤も、不可能なそれを可能にするのが『混沌^{カオス}』なのだが
. . . 伐那にもう一度逢いたいと言う感情を、僕には完全に圧し殺す事は出来ないが、きっと伐那は最期の覚悟を決めて僕の命を救つてくれたのだ。

伐那の誇りの為に、僕は伐那を救つたりしない。

僕の身勝手な救いなどでは、本当の意味で伐那を救うこととは出来ない。

「…………僕は生きるよ。きっとそれが『僕達三人』の生き残った理由だから」

「お供しますよ…………たとえ世界が終わっても…………」

「…………」

過去世界か異世界か、そんな事はどうでも良かつた。

生きることが何より大切だといつ事に、今更気付いた気がする。

『彼女』に貰つたこの命に、感謝を込めて…………

「ハ意…………まちい？」

「名子の様ですが…………やい？」

「『やいじる』よ…………まあ確かに読みこくにゃど」

何やら立派なお屋敷の前で、どうでもいい事を話す白と黒。
白といつのは僕であり黒といつのはルヴィの事だとほんまでも無
い。

そしてこの異様な一人に話しかけてきたのは、銀髪の少女であった。
見た目は一二歳程度で、注意深く僕達を見ているが警戒している気
配は無い。

ここが本当に異世界なら、ここで友人を作つておくれのも良いかも
しれない。

「これでやいじるって読むんだ……」

「やはり漢字って難しいです……といひで貴女は？」

「八意永琳、こここの娘よ」

八意永琳 「これは本名では無い。
名前には力が宿る。今の名前からはそれが全く感じられなかつた。
我が能力はその特殊さ故、相手の言葉に含まれる僅かな違和感で嘘
を見抜く。

. といつのは嘘で、見抜ける嘘は名称に関するもののみ
である。

田には田を、歯には歯を、嘘には嘘を、である。

「あまき るか 雨樹流華。ゴスロリとかが趣味だよ」

「あすか てんい 飛鳥天射。同じく趣味はゴスロリ等です」

瞬時に対応し、更に偽名まで考えられるルヴィは凄いと思う。

. ティルヴィング・スカーだから、スカーを弄つて
飛鳥か。

天射は テモンもイも名前に入つてゐる。流石ルヴィ。
凄い。

ちなみに僕の場合はアマキールから雨樹、レフィルカから流華であ
る。

「…………立ち話もなんだし、上がっていく？」

「良いの？」

「そうです、悪いですし…………」

「良いわよ良いわよ、あなた達面白そうだし、悪い人では無せそう
だし」

「じゃあお言葉に甘えて」

「では私も」

僕達は言われるまま、八意邸へと入つていった。

この少女…………永琳が、僕達に興味を持ったのと同じく、
僕もまた永琳という一人の謎の少女に興味を持ったのだった。

切り出した少女 永琳に何を言われるか、何となく予想は出来ていてる。

「何でしょ、う？」

「うふ？」

「 さて、単刀直入に聞くわ」

「 何で破茶目茶な世界にやつて来てしまったのだろう。」

「これでは本格的に常識が通用しない可能性もあるじゃないか。」

掘り炬燵に座布団は勿論、敷地内の全てが和風の八意邸。

しかし扉が自動になつていてる事を始め、機能性に関しては『二十一世紀の世界における現代社会』のそれを遙かに上回っている。

「面白そう」と言ったときの表情から伺えた、並々ならぬ知的好奇心……。あれはとても、唯の人間に對して向けられる事の有り得ないものだつた。

「あなた達、普通の人間じゃ無いわね？ 二人とも途轍もない力の持ち主。

……仙人か何かかしら？」

ほれ来た、やはりそうであった。

……妖魔と魔剣と言つて襲われたくないのをそういうことにしておく。

「……調和と混沌の仙人、レフィルカ・アマキール。ちなみに軽く一万歳」

「破滅へ導く仙人、ティルヴィング・スカー。同じく一万歳以上です」

「……はつきり言つて予想以上よ。規格外じゃない」

規格外……。

僕は意外にも、規格外と言える程の力は持っていない。

『調和と混沌を操る程度の能力』は巫山戯た能力だが、本来戦闘向きでは無い。『瞬を操る程度の能力』は瞬発力その他を上昇させるだけの能力である。

ルヴィは僕以上の超強大な魔力を持つが、それだけだ。『破滅へ導く程度の能力』は、つい最近破つた上に規格外らしい。

「規格外になんて、僕達にはなれないよ」

「その通りです。それこそ程遠い…………」

「…………まあ、良いわ。あなた達二人が仙人だつていう事は伏せておく？」

「そうだね、騒がれても困るし」

「お願ひします」

八意永琳 本名は何なのだろう?

ルヴィが気付いていないあたり、相当この名に慣れているようだが

それより、僕達の正体は名前で勘付かれる事がありえるかもしねない。

Re fil u c a A m a c h i e r Re fil u
c aからaを取つて並び替えれば分かる筈だ。
. そう、Lucifer Chimera（ルシフェ
ル・キマイラ）である。

悪魔にして混合生物、つまり悪魔でありながら鬼でもある僕そのもののが事だ。

尤も、僕は人間もある。

人と悪魔の一人が『一つの存在』になつて誕生したのが僕という存在であり、鬼である伐那と悪魔分の多い半人半魔の僕が一つの存在になつたのが一万年前 本格的に『混合生物』になつたのはあの時だろう

「 頭の中で話が跳躍するのは悪い癖かな」

「？」

「流華、どうかした？」

「あ、何でもないよ。あともう流華じゃ無くてレフィルカで良いよ」

「私も天射では無くティルヴィングで大丈夫です」

「…………じゃあお詫葉に並んで、本丸で呼ばせてしまひつわ」

ふむ…………今までの様子からして、永琳は俗に言つ『天才

なのだらう。

まだ12歳ぐらいなのに、話術はまるで賢者の如く巧みである。

…………だが所詮は子供。僕の仕掛けた簡単な罠に掛かる…………

「君が本名で僕達を呼ぶなら、僕達も君の本名を知らないと不平等だよね？」

罠には餌が必須だ。この場合は本丸とこり餌である。

最初から「普通の人間じゃ無い」と気付いていた事は分かつていたので、態と最初に偽名を教え、それから本名を教えた。等価交換に持ち込んだのである。

「…………まあ、最初から永琳が偽名だと気付かなければ不可能な方法だ。」

「…………あなた、やつぱりただ者じゃ無いわね」

「流石です…………で、レフイ様の言つ貴女の本名は?」

永琳は「仕方無いわ」と呟き、ゆっくりとした重い口調で言った。

「×××」

それは、地上に存在する言葉で発音できる様な前では無かった

05・不思議な街と一人の少女（後書き）

感想等よろしくお願ひします。

06・月へ去りし文明（前書き）

どうも鎧姫水霧です。

今回は説明文多めです。特に最初の方。

時は流れ、別れの時がやつて來た。

この世界の人間は長い間、不老不死についての研究を進めていた。薬師の一族である八意家の歴史の中でも飛び抜けた天才だと言われる永琳の能力は『あらゆる薬を作る程度の能力』である。その為、研究機関からは「彼女なら不老不死の薬も作成出来る」と大いに期待されていた。

しかし天才である永琳でも、原料が無ければ薬など作れない。理論上は作成可能でも、現実問題としては不老不死の薬の原材料になる物などこの世には存在しない。つまり、不老不死など机上の空論でしか無いのだ。

しかし人類は、僅かな可能性を『月』に見いだした。

研究の結果、地上には『穢れ』というものが円満しており、それが地上のあらゆる生命体に寿命を齎している事が証明されたのだ。永琳の妹である八意永夜により発表されたこの研究結果は、逆説的に「『穢れ』が無い場所でなら『不老』になれる」という一つの答を導き出した。

それと同時にあらゆる惑星の研究が進められ、たった一つだけ、人間の生活できる星が発見された。それが月である。何でも、『裏の月』なる場所には海も木もあり、地上と変わらぬ量の酸素までもが存在しているらしい。

その裏の月へ辿り着く方法が明らかになつた為、移住を行う事になった。

無論、移住が嫌な人間は地上に残ることになつていて、当然数は少ないが、僕とルヴィ、そして永夜も残るらしい。「私は普通に生きたい」と言う事だ。

僕とルヴィは人類全体からも仙人だと認識されるようになつてしまつたし（僕が羽だけ目撃され仕方無く羽付きの仙人だと誤魔化した）、人助けを行つていたからか、最早信仰される存在になつてしまつている。それでも月に行かないのは地上に残る人間達の事を見守る為、そして本当にここが異世界なのか確かめる為である。研究者や地位のある人間は全員月に移住するのだ。いくら永夜が残ろうと、秀才一人では文明が廃れて消滅するのも時間の問題だと僕は考えている。

永夜は友達だし、当然、全力で出来る限りのサポートはする。それでも流れる時間には勝てないだろう。この超高度かつ超小規模な文明は、永琳を始めとする幾人もの賢人達が協力しなければ成り立たない。

襲撃してくる妖怪や悪魔は僕とルヴィで撃退出来る上、永夜もそんじよそこらの妖怪よりよっぽど強い。科学に頼っているのは本でも見たことの無いような、永夜の靈力を弾丸にするスナイパーライフルのみであり（靈力：人間の持つ、魔力や妖力と似た力）、その他は自身の実力のみで妖怪とタメを張れるのが八意永夜である。能力は薬師一族とは思えぬ『空間を操る程度の能力』。少しだけなら時間までをも操る事の出来る、人間とは思えぬほど強力な能力を所有している。

それでも僕の予想では、この文明は人類史の始源まで後退する。

永夜はあくまで人間であり、寿命は必ず訪れる。『空間を操る程度の能力』で寿命を引き伸ばしたとしても、人間である限りは必ず限界があるのだ。子孫を遺すにしても、永夜程に強く、賢く、そして

人間全体を纏められる人間は産まれて来ないだろ。残るのは僕達を含めて僅か五名。何がどうなろうと、文明はここから急激に廃れていくのだ。

無論、永夜はそれが理解出来ないほど愚かでは無い。あと一人の幼い兄妹も、その事を十分に理解して地上に残つたという様子だ。地上に残るという事は、彼らにとつては自ら破滅の道を選ぶのと等しいのだ。

「あなた達と過ごした時間、私はすごく楽しかったわ！！」

永琳が、スペースシャトルから叫んだ。
今の科学力を以てすれば、シャトルに恋を付ける程度は造作もないのだ。

こちからも大声で、思つことを叫ぶ。

「僕達もだよ！…… 永琳、きっとまたいつか逢えるよ！」

！」

「永琳…………有難う御座いました、私達は貴女を忘れません！！」

「姉様…………どうか元氣で…………」「…」

僕の後にルヴィイ、永夜が続けた。

ルヴィイとはばずつと一緒にたが、ここまで…………悲しげな笑顔は初めて見る。

そして永夜は…………泣いていた。分かっていた事でも、やはり大切な人と別れるのはとんでもなく辛いことなのだ。姉さんを越えてみせると、ずっとライバルとして永琳の名を掲げていた。僕達とは比べ物にならないほど辛いだろう。

「永夜！ 今回あなたは私を越えたのよ…………泣くな！」

「…………姉さん…………はい…………！」

．．．．．永夜にとつて、これ以上無く嬉しい一言だらう。

幼い時から、全てにおいて自分の上を行く永琳の背中を追い掛け
いたという。裏を返せばそれだけ永琳を姉として尊敬していたのだ。
その永琳に「私を越えた」と、つまり一人の科学者として、対等な
存在として認められたのである。

シャトルのエンジンが掛かり、轟音に掩き消され、声は通じなくな
った。

永琳は微笑んで、窓を閉じた

窓にカーテンを掛け、広々とした通路を戻つて行く。
このシャトルは中の空間が見た目より広い。言わざもがな永夜の能
力だ。

「良いのか？ おそらくもう一度と逢えんのだぞ」

「月夜見様 いつからこちりに？」

月夜見様 幼くして『月の都』のリーダーになる方だ。私よりも年下であり私が少し前から相談役を務めているのだが、知性は多少劣るもの、力とカリスマ性に関しては恐らくレフイルカよりも上である。

「ついさつきだ。 あの一人、ただの仙人では無いのだろ？？」

「やはり気付いておられましたか。妖怪でしょう。

ティルヴィングは魔剣の憑喪神で間違いありませんが

「.

「我も、レフイルカと言つあの存在は到底理解できんのだ。当然手掛かりはあるが、これだけでは何とも言えん」

月夜見様はそう言いながら、懐から一枚の紙切れを取り出した。

「レフイルカ・アマキール…… Refiluca Am
a chierだ。

Re filucaのaを取つて並び替えると

「Lucifer Chimaira (ルシフェル・キマイラ)
？」

「その通り、魔王と混合生物の名だ。当然未来の な」

『未来の』

月夜見様の『全てを見通す程度の能力』は、未来予知をも可能にする。

ただし能力発動の媒体になるのは右眼のみであり、脳への負担は大きい。

この能力を発動した際には、月夜見様の漆黒の右眼が蒼く染まる。

「あまりその能力は使われない方が宜しいのでは?」

「ほんの少し先の事だ、この程度で負担は掛からん。
. 本当の『負担』とは、この能力の反動の様な事を言つ
のだ」

黒かつた月夜見様の左目が、真紅に染まつた。
背筋が凍り冷や汗が止まらなくなる感覚

『夜を創造する程度の能力』

「 それの比較対照になる能力なんて、まず存在しませんよ」

「どうだかな 『調和と混沌を操る程度の能力』には崩されるやも知れん」

「まさか。まあ有り得ないと言い切るのは愚かですが

調和と混沌を操る つまり世界の概念そのものを操る能力だ。

『空間を操る程度の能力』がそうだと勘違いされがちだが、宇宙空間が膨張し続いている様に、これは世界全体の現象として有り得る能力だ。

『破滅へ導く程度の能力』も、レフイル力や月夜見様程の力があれば破れる。

この系統の能力は、同じ程の力を持たない者に対して強大過ぎる。靈力・身体能力・武術・戦術では、私の方が月夜見様よりも遙か上である。

しかし、私と月夜見様が戦えば、善戦は出来ても勝てはしないだろう。

・・・・・それだけ反則的な能力なのだ。

「その通り、有り得ん話では無い。まずレフイル力は本氣を出していい。それにあの様子だと、我と同じく完全には扱いこなせてはいないのだろう」

「……私も、仮にも天才と呼ばれていますが、そこまでは理解できません」

終焉と同義である月夜見様の『夜』を崩すなんて、私には想像も出来ない。

私は一人が戦う可能性の低さも考え、その事は気にしない事にした

06・月へ去りし文明（後書き）

流華「僕一言しか喋つてない」

天射「私もです」

水霧「私は悪くない。そういう回だつたんだよ」

流華「ていうか、何で偽名で表記されてるの？」

天射「ずっと使つていたなら話は別ですが、一瞬しか使つてないで
すし」

水霧「レフィイとかルヴィで表記すると括弧がずれて読みにくいか
ら」
流華「ああそう」
天射「で、永夜と私達、そしてあの兄妹はこれからどうなるのです
か？」

水霧「それはここでは言えない。大人の都合つてやつ

流華「僕の予想では、妖怪との戦いが一回はある」

天射「でも変な話、私達が負ける気がしませんよ」

水霧「その下らねえ幻想を打ち壊す」

流華「幻想と現実を調和させたら壊せないね」

天射「 まず、貴方は男と女どちらなんですか？」

水霧「何か作つてコミケ辺りにサークル参加したりしたら分かるよ

流華「僕の予想だとボーグシユな女」

天射「私の予想だと女々しい感じの男です」

永夜「私の予想では顔が土砂崩れした男ね」

流華・天射・水霧「うわあ！？」

永夜「さつきから聞いてたよ、気付かなかつたの？」

流華「実を言うと気付いてた」

天射「私も誰かが居るとは思つていきました」

水霧「私？いや当然気付いてたよ？」

永夜「嘘ね」

流華「嘘だね」

天射「嘘ですね」

月夜見「嘘だ」

全員「うわあつ！？」

月夜見「私は今シャトルから飛んできた。すぐ帰らねばいかな。さ
らばだ」

全員「えー・・・」

水霧「感想等よろしくお願ひします」

07・地に残つし者達（前書き）

どうせ鎧姫水霧です。

07・地に残りし者達

取り敢えず、自己紹介をする事になつた。

言いだしたのは勿論永夜で、「お互いを知るのが今最初にやるべき事」という理由で始まつた。僕は仙人という事になつてているので実年齢を言つて問題無いだろう。ちなみに完全には覚えていない。一万五百歳以上。

「俺は霧月欠きりづき かける、16歳です」

「雨樹流華………　忘れたけど一万歳ぐらい」

「…………え!?」

「飛鳥天射、同じく一万歳程度です」

「え!？」

「八意永夜、17歳。安心して良いよ」

「………」

欠は案外ノリが良い。

永夜に実年齢を教えた時の反応なんて「面白い」で終わりだつた。

……それより、欠の陰に隠れてもじもじしている彼の妹が
気になる。

僕の視線に気付いたのか、妹の代わりに欠が切り出した。

「妹の霧月満^{きりつき}まだ6歳で恥ずかしがり屋なので、出来れば優しくしてやって下さい」

「恥ずかしがり屋か」

なむはる。

満に近づいて行き、そのまましゃがみ込み顔を近付ける。

「満ち一ん？」

卷之三

ありや、逃げられた。

「…………無理ですよ、俺とですり喋つてるのは見たこと無いですか」

「むう…………なんか悔しい」

「…………」

俯いて悔しがる僕を満が見ているのに気付き、そちらを見る。しかしコンマ一秒ほど目を合わせただけですぐ逸らされてしまった。

満が顔を隠そうと頭を動かすと、それと同時に藍色の髪が揺れる。その度に睫に掛かる少し伸ばしすぎた感じもするぱつつの前髪を目を細めてくすぐったそうにかき分ける満が可愛い。

「…………さあ、自己紹介は終わりでいいよね?」

永夜の間に、欠が答えた。

「その前に俺の能力ですが、『描いた物を実体にする程度の能力』です。

刀を描けば刀を、獣を描けば獣をその場に創り出せます。

．．．．．俺の靈力の大きさと釣り合つたものしか実体には出来ませんが

「．．．．．強いね、充分だよ。

僕は『調和と混沌を操る程度の能力』。混ざる混ざらないを変える能力。

『瞬を操る程度の能力』もあって、瞬間的な速度を操れるよ。

例えば音や光を遅くしたり、自分が一瞬だけ音速以上で動いたりね

「私の『破滅へ導く程度の能力』は戦闘には役立ちません」

「私の『空間を操る程度の能力』は文字通り空間を操る能力。時間もほんの少しだけなら操れる能力だよ」

「歯さん強すぎるとじや無いですか ．．．．．」

「皆さん、ねえ．．．．．ルヴィの能力の恐ろしさに気が付いているのか？」

そして満の能力はどうなのだろう？ 欠の能力と近いのだろうか？

「満さんの能力は？」

ナイスルヴィ．．．．．じゃなくて天射、僕が聞こうとしていた

事だ。

「満のは『言葉を実体にする程度の能力』、喋れない原因の能力です。

なにせ文字通り『言った事が全て実体化する』能力ですから . . .
. . .

「『言った事が全て実体化』 ? 制御出来ないの？」

「おそれくは無理です」

「まあ練習すれば流華の言ひつけに制御できると思つ
よ。

そこまで性質たちの悪い能力は滅多にあるものじやあ無い」

そうだ、滅多に無い。

能力は基本的に『所有者に付いているもの』だ。

『能力に所有者が付いている』なんていう事はあるはずがないのだ
から、『所有者が絶対に制御出来ない能力』なんものは有り得ない。

「さあ、これで自己紹介は終わりにしよう！
食糧も寝床もあるから取り敢えず、少人数化を嗅ぎ付けて襲つてくる妖怪を撃退出来るよう各自 二人は関係無さそうだけど、鍛錬しておくよう！」

残された五人が解散すると同時に、遠くで大きな魔力の揺れを感じた。

恐らく全員が気付いていたが、僕達は誰も、何も言わなかつた。
もしかしたら僕達は、自らの終焉を心の何処かで悟つていたのかも
知れない

07・地に残つし者達（後書き）

感想等よろしくお願ひします。

08・新たな日常、唐突なる悲劇（前書き）

いつも鍔姫水霧です。

余談ですがMHP2ndGで上位ミラボレアス（伝説の黒龍）討伐しました。

装備は強化した下位キリン防具（一つ防御力66）と護符と爪を二種類。

武器は黒銃槍で大タルGを1クエスト5つずつ持ち込み、バリスタ等不使用で4回目で討伐完了（体力20000撃退5000なので当然ですが）。

下位装備なのでそれぞれ40分近く掛かりましたが合計死亡数1回です。

．．．．では、いつも通り短文ですので気軽にどうぞ。

「…………かけ…………る…………」

「よし…………次は『雨が降る』って言ってみな

「あめが…………ふる」

満の『言葉』と同時に、雨雲が空を覆い尽くす…………
筈だった。

しかし雲一つ無い晴天は表情を変えず、当然一滴も雨は落ちてこない。

「満ちゃん、大分話せるようになったじゃん」

「流華…………いや、レフイルカのお陰だよ、感謝してる」

永夜さんと流華、天射さん、そして満と俺だけの生活になつてから
早二ヶ月。

俺の能力自体に進展は見られないものの、レフイの能力による手助けもあつて満は『命令』以外の言葉を実体にしないように出来る所まで能力を制御出来るようになつた。

それでも恥ずかしがり屋なのは変わらないが……

「……………ありがと」

「どういたしまして、満ちゃんー！」

感謝の気持ちを伝えられるようになつただけでも、大きな一步だろ
う。

レフイが抱き付こうとすると避けるのは変わらないが。

……………雨樹流華 というのは偽名だつたらしい。

理由は単純、正体を晒すと人類と戦争になりかねなかつたからだ。
実際レフィルカ・アマキー尔は仙人では無い。しかし妖怪かと言わ
れれば少し違い、妖怪よりは近いが完全な悪魔でも無い。神の一種
かとも考えたが、信仰および神力を得たのは仙人として善行を積ん
で、それが少し違う方向に働いた結果だといふ。

レフイ自身は『妖魔』と呼称している。確かに妖怪と悪魔が合わさ
ったような存在なので、この名が一番正しいのだろう。

ちなみに天射さんは本名テイルヴィング・スカー。魔剣の憑喪神だ
といふ。

一度剣を見せてもらつたが、全長は140cm近く柄や鍔は闇を圧

し固めた様な漆黒、刃は更に深く濃い黒という如何にもらじい魔剣
だった。

「…………そもそも、僕の能力はこいつものなんだ」

少し粘つた末に諦めたレフィイが、それを紛らわすように言った。

「こいつってどういづ？」

「いや説明しちゃって言われるとなかなか難しいんだけどね……
要するに完全じゃ無いものを完全に近付けるのが得意っていう事」「でも…………能力以外でもそつだけど、完全なんでものは無い」

「勿論。本当の意味の完全なんて存在する訳が無いよ。…………だからこそ断言するけど、月に移住した人達の言う『不老不死』なんてのは絶対に有り得ない。

当然あの人達も解ってるんだろうけど、そうなるともし永琳が本当に『不老不死の薬』なんていう代物を創り出したとしたら…………いや、やっぱり何でもないよ

もし永琳さんが本当に『不老不死の薬』を創り出したとしたら…………

おそらくそれを飲んだ人間が もしくは永琳さん自体が、この世の理を打ち壊した超級危険人物として処刑 いや、死なないことを考えると監禁もしくは文明からの追放の罰を受けるのだろう。

「 止めさせないと！！」

「大丈夫。永琳も最初から創る気なんてさらさらないよ。第一、いくら永琳でも完成には 多分數十～数百年以上は掛かるから。勿論だれかの能力を借りたとしての予想ね」

「だれか 月夜見様にそんな能力は無いし、多分今の時点では 」

「そんな能力を持った人は居ない。それ以前に心配する必要は無いよ欠」

「 確かに創れる筈は無いだろう。

ただ、それを創ってしまうのが天才・八意永琳である。

「かける だいじょうぶだよ

「 満、ありがとう」

しゃがんで声の主に田線を合わせた。

まさか満に励まされる」となるとは…………俺もまだまだだ。

レフイと比べたら云々とかは抜きで。

キュルルルルゥー と、不意に聞こえてきた可愛らしい音。それと同時に、俺のすぐ横にいたレフイの顔が赤くなつた。

「気付かなかつたが…………妖魔も腹が鳴つたりするんだな」

「う…………うるさい！ 人間の姿になるとお腹も空くし鳴るよ」

「…………べすつ…………」

「あー満ちゃん今笑つたでしょー？」

「…………一人を呼んで食事にするか。俺も腹減つたし」

太陽が昇つてから結構な時間が経つた。丁度良いタイミングだろう。
俺はイチャイチャする二人を放置し、天射さんと永夜さんを呼びに行つた。

「獣の肉を焼いただけの簡単な料理です。

流石に肉だけではしつこいので野菜も盛り付けています」

「うわあお・・・・・・

「・・・・・・これは・・・・・・

「おお・・・・・・

「・・・・・・んー・・・・・・

ハ意家の厨房をたまに借りて料理を学んでいたルヴィ。僕と永夜と欠と満は、田の前に出された修行の成果にただ啞然とするのみ。

丁寧に切つた肉と野菜を盛り付けただけの至極単純な一皿である。それでもこの造形美や茶色と緑のコントラストは芸術の域に達する。最早目前のこれが本当に『食す為の物』なのかすら判断しかねる程に美しく、一同の皿線は釘でも打ち込まれたかのように固定された。

「…………花を意識したのですが、やはり不器用ですね私

「え？ いやいやいや器用すぎるから」

「テイルヴィング、恐れ入ったよ」

「やはり凄いですよ、俺には無理です」

「…………ルヴィ…………すいよ…………？」

謙虚である。しかしこれは謙虚では済まされないクオリティである。ルヴィは少し照れくわさつに、そして紛らわすように言った。

「まあ冷めてしまつ前に凹じて上がつて下せー」

「勿体無いな…………」

しかしあの「」の言葉に賛同した者は居なかつた。

「食べずに腐らせる方が勿体無いよ」

「やう、食材は食べる為に存在するからね。食べよう

「かける…………たべよ?」

「…………分かった、食べるよ

「何だこのアホー感…………」と聞こえたが幻聴だといふ事にしておけ。

僕は一番最初に、野菜と美味しそうな肉を箸で掴んで口に運んだ。

思えば、この選択が悲劇の始まりだったのかも知れない

水霧「え？ 何この空氣！？」
・・・・感想等よろしくお願ひします」

0?・新たな日常、来たりし蒼き刃（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

下手な真似はしません してますが。

Normalのアイシクルフォールでチルノの正面に行くのはバカだと思います。

0?・新たな日常、来たりし蒼き刃

「…………欠…………満…………永夜…………？」
「…………づう…………」

うつ伏せに倒れた三人…………そして続いて倒れた僕。激しい目眩と頭痛と腹痛に襲われ、為す術もなく床を這う。三人は既に気を失っているがそれもその筈。角も翼も尻尾も無く妖力も魔力も神力も無い状態とはいえ、仮にも一万五百年以上生きた僕をも追い込むものなのだ。永夜も欠も一般的な妖怪のそれを遙かに上回る実力を誇るもの、やはり抗う事は叶わず。

満は…………靈力は文句無し、今まで見た中では永琳の次に大きい。

三人の中では満が最も大きく、次に永夜、その次に欠の順番になっている。しかし戦闘ではその真逆で、実戦においては欠が最も強い。当然肉体的な問題もあるが、それよりも圧倒的な戦いのセンスの影響が大きいと言える。

欠と対照的なのは永夜である。永夜は科学者、幼少期から妖怪退治をしていた欠の様な戦闘経験は殆ど無い。しかし天才である姉譲り

の知恵を駆使し、綿密な計画の下、自身の開発したスナイパーライフルで遠距離戦を行う。

三人の持つ実力や強さは確かなものである。

そんな三人と妖魔である僕を一撃の下に沈めたのは

「 ルヴィ . . . 何 入れたの？」

「はい！ 永夜のお腹の調子が悪いと聞いたので、隠し味にげっ」

最後まで聞き取れない内に、僕は意識を失った

「何で料理に下剤なんか入れよつと思つたのー?」

「…………永夜が調子が悪いと言つていたので、ビタセナなら料理に、と…………」

「あのねえ…………薬は料理に入れちゃ駄目だよ!」

「何故ですか?」

「薬は体調を調える為、料理は栄養をとり味を楽しむ為の物!!!!」

「…………申し訳御座いませんでした」

「「割とあつやつー?」」

思わず同時に叫んだ僕と欠。顔を見合せ、はにかんだ。

「顔赤くする必要は無いだろ」「つるさこー!」と返す。

心だけはまだ男のままだと思っていた時期が僕にもありました。
恥ずかしいがつまり、僕は欠の事が好きである。

たまらず自身の体を抱える程に、いつだつて会いたい程に、四六時
中頭から離れない程に、名を呼ばれるだけで嬉しい程に、新月の夜
も眠れない程に…………

恋しくて、戀しくて、切なくて、苦くて、頭がおかしくなる . . .

満はあいづえおかげへなれこす と、健氣な会話の練習をしてくる。

なんと一週間も寝込んでいたらしげ全員無事だったのを良じとしよつ。

ルヴィに対する永夜の説教も終わり、何時も通りの午後である。

・・・・・まあ、妖怪が襲つて来るのも『何時も通り』な訳で。

「妖力 なかなか大きいけど、満にやらせてみよつか？」

「賛成。ただ見守りはするけどね」

「レフイ様に同じです」

「 だな。満、まゆ田を合せた『アーマンド』 . . .

「 . . .

何を言つたのかは分からぬが、満は笑いを堪えて聞いていた。

そして「うん、分かつたよ」と欠に言い、妖力の近付いてくる方を向いた。

ちなみに満の能力で『生物に対して命令する』際には、最初の段階で対象と田を合わせてしているのが絶対条件である。「田を含ませる」というのは通じないが、「ミンチになれ」等の『命令では無い言葉』は通じるのでどのみち強い。

当然妖力等で『言葉』の効果を軽減することは出来るが、「空氣よ消滅せよ」なんて言われてしまった場合、自身の力ではどうしようも無いだろう。欠の能力とは違つた驚異的な燃費の良さも特長の一つだ。

僕達五人の前に、大きな白い鳥の翼を持つ少女が降り立つた。

> . i 3 7 2 6 6 — 3 4 7 6 <

着崩した青黒い着物の下にミニスカートを履き、肩と臍は露出している。

膝上から指の付け根までの包帯、草鞋、手には彼女の身の丈よりも長い刀。

嘴を象つた金色のネックレス。瞳は全てを射抜く様な金色

・ · ·

翼と嘴の形から見ると、おそらくは梟の妖獣である。

「 行け、満つ！」

欠が小声で合図を送った。何をするのやら……。
そして敵ながら約五尺の超長太刀は格好良いと思つ。

「うん……妖怪っ！『その場で武器を捨て、踊りなさい』！」

「まさか私に命令とは、つてちょつ……何よこれ！？」

梟の妖獣は刀を投げ捨て、両手を上げ膝を曲げ、奇妙な踊りを始めた。

ああ哀れなり梟……満の『命令』は僕の能力でも解除出来ないのだ。彼女の力も伐那の力も完全に解放したらどうかは試してないから知らないが。

「…………ふーザーケーるーなー……」

梟の雄叫び？と共に響いた、バチイツ、という何かが切れる音。

同時に梟は刀を拾い、鞘を抜き捨て僕達を睨んだ。

…………おそらくは『切断』とか『解除』とかの能力だろう。たまげた。

「ほう……満の命令を解除するとは凄いですね」

「なんで冷静なんですか」

淡々と述べるルヴィにツッコミを入れる欠。意外にもルヴィは天然である。

そして僕はスナイパー・ライフルを構えた永夜を止めた。

ここは僕かルヴィが行くべきだろう。欠がジリ貧で粘れるかすら怪しい。

おそらくルヴィなら勝てるし、翼のみの僕なら互角程度だ。

「満下がって。ここは僕が行く……良いよね永夜？」

「うん。あたしじゃ勝てないみたい……」

「…………任せたよ」

二人の承諾を得て、ルヴィと欠にも確認しようとそちらを見た。

「レフィ様の仰せのままに」

「危なかつたらすぐ解放しろよ、角も尻尾も」

．．．．．聞くまでも無かつた。最後に欠の方を見て、言ひ。

「欠．．．．．ありがとう。じゃあ行くね

「ああ、行つてこいレフィ」

「．．．．．そろそろ斬り掛かつて良いかしら？」

踊らされた挙げ句にスルーされた梟の妖獣は、哀愁すら漂わせながら言った。

しかし．．．．．やはり手加減はいらない様である。

「やよい そうめい八宵蒼命。梟の妖獣にして刀の妖怪」

「レフィルカ・アマキール、混合妖魔．．．．．悪いけど手加減しないよ」

蒼命は白銀の刃を振り払い、首と肩をバキバキと鳴らした。

僕は能力を発動し、角と尻尾を顕現、そして莫大な魔力と妖力を解放した

〇？・新たな日常、來たりし蒼き刃（後書き）

蒼命「私の扱いが酷すぎるのよー！」（机に片足乗せて）

水霧「なんだつてんでい！！」（裾の内側で腕組んで）

水霧「なんだこてんてい!!!(睨みながら)」

水霧「…………なんだつてんでい…………」（涙目で）

蒼命「あつち

「……なんてね！！」（腹を抱えて大爆笑）

「**鍔姫水霧の安否は？」**想像にお任せします。

10：「槍の鬼、蒼き剣閃（前書き）

いつも鍔姫水霧です。

『Re:Fire Rain』というオリジナル小説を書き始めました。まだ始まつたばかりで殆ど書いてませんが、軽く読んで頂ければ幸いです。

10・一槍の鬼、蒼き剣閃

「久し振りですね、あの姿のレフイ様は」

「俺は初めてです。ていうかルヴィさんぐらいですよ見たことがある
の 」

凄まじい妖力と魔力が解き放たれ、同時に細長く白い角と尻尾が顕現した。

しかし普段ですら偶に出している翼はブレスレットのままである。似合うし可愛いのだが服が大き過ぎて隠れてしまつので勿体無い。

しかし まさかとは思つが

「 羽、出しませんね」

「確かに。 ! ルヴィ、あれって 「

「槍？一本も…………？」

「…………間違いありません」

レフィ様の手元に構えた武器…………双槍。あれは間違い無く伐那の物だ。

その証拠に一本だった尻尾は一本に戻り、槍状だった先端も元の獣のような形になり、後に半分程度まで解放されていた魔力と共に消滅した。

角のみの状態…………まさに、純粋に最強のパワーを誇る鬼そのものである。

「皆さん、少し距離を取りましょう。出来れば見えなくなる所まで

「鬼…………ですよね、あの角…………分かりました」

「そーめー大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。レフィは妖怪でもよっぽどの事が無ければ殺さないから

「…………永夜、空間を繋いで下さー」

「分かつてゐよ、つとー」

永夜の能力により開かれた『扉』。レフィ様曰く『ビニでもドア』。最初に永夜が入り、満が続いた。

「…………欠、心配ありません。ビニも強過ぎる一撃に巻き込まれますよ」

「いや、心配なんてしてませんよ。レフィルカは強い。ただ…………髪下ろしたのも新鮮だなあ、と…………お思つただけです！」

欠が明らかに顔を赤らめて言った。青春…………欠なら文句あるまい。

レフィ様になんばなんてする愚か者が居れば叩き斬るが。

そして、この欠の一言には…………

「激しく同意です！！…………あ行きましょう」

「…………ですね。普段ツインテールとかツーサイドアップだと云々…………」

そっちはですかいーと心中でツツ ツツツツ、私は欠に続いて扉に入

つていった

「さあ、始めようか」

「大太刀より長い得物なら有利、とでも？」

「まさか。ただ単に、純粹に強いからだよ」

「なら羽と尻尾も出すといいわ」

「んな単純なもんじゃないの。出来ないし、無理してもすぐバテる」

「そりゃ、じゃあせめて耐えてみなさい……」

迫り来る白銀の刃 鐔迫り合いは無理か。

縦斬りを横に小さく躲し、刀身の横部分に左の槍による突きを入れて弾いた。

すかさず右の槍で首を薙ぎ払う。が、蒼命はしゃがんで躲しそのまま回転、遠心力で速度を増した横一文字斬りで足首を狙つて来た。それを軽く跳んで回避し双槍に妖力を込め、全力でX字に振り下ろす。

「ななめじゅうじきそうそう
斜十字鬼双槍！！」

言わずもがな、伐那の技である。

そもそも僕やルヴィが自分の技に名を付け始めたのも伐那の影響だ。

約200m先まで地面を抉り取った剣圧。特に妖力を飛ばしている訳では無い。

ただ今の僕の力は『伐那そのもの』、パワーは理不尽な程に強過ぎるのだ。

しかし、おそらく剣圧を斬ったのだろう。地面に出来た二つの傷跡は、真っ二つに斬られたのが目で確認出来る程に離れた位置にあつたのだ。

「…………巫山戯た破壊力ね。当たれば今頃死んでるわ」

「それはこっちの台詞でしょ、あんな斬撃飛ばさないでよ…………」

剣圧を斬つた斬撃は、そのまま僕の身体の中心をめがけて飛んできていた。あれを当然の様に切り裂く斬撃…………躲さなければ真つ二つだった。

．．．．．まあひつぢは『瞬鬼』、そんな簡単に斬られても困る
のだが。

「じゃあ仕方無い、こいつを廻おうがいい。」

「...!？」

言ひながら懐に左手を突つ込む蒼命。ああポロリしちゃうー危ない

「何で。フェイクよ！！」

「ああ、…………！」

ぬぐう
・
・
・
・
・
お色氣攻撃とは卑怯なり梟
・
・
・
・
・
・

「なあうんて。これもフェイクだけど何か質問ある?」

「…………そんな馬鹿な…………」

ガチバトルは終了しました。

…………簡単な話だ。

槍の位置を工夫して一部に隙を作れば、そこに斬撃が来ることは自

明の理。

刀が振られるのと同時に瞬の能力を全開にし、刃に触れず刀身を受け止めた。

切れ味が幾ら良かろうと触れなければ関係無い。

負けを悟り、そのまま崩れるように身体を地に伏せた蒼命…………

僕はその隣に立ち、前を見据えながら話した。

「汝との戦い、愉しかったぞ。更に精進するが良い」

「く…………そ……………完全に負けた…………

この私が…………」「…………

「暫くは地に伏せている。死にたくないのならな」

「…………くそつ…………」

「…………汝を見ていると、昔の私を見ているような気分になる。

己より強い剣士に挑み、負け、傷だらけの体で何度も立ち上がったものだ」

「何度でも…………か？」

「そうだ。…………私は誰より弱かつた。何の取り柄もなかつた…………そして誰より、負ける事が口惜しかつたのだからか…………そして誰より、負ける事が口惜しかつたのだ。

負けたくないくて、強くなりたくて、ただひたすらに剣を振るつた

「そこまで…………一体何の為に！？」

「…………大切な者を、護る為だ」

「…………」

「汝にも居る筈だ、護るべき者が」

「…………居ないわ。私は…………刀を打つばかりで、ずっと一人だつた。

護るべき者も、護りたい者も居ないのよ…………」

「どうか。ならば…………私達は、今から一人だ。

私は汝を護る。汝は好きにするが良い。汝自身の決めることだ」

「…………今は貴女を護る力が無い…………でもいつか……

・・・・・わひと護つてみせるわ

「良いだろ。汝がそれを望むなら、私はその時が来るまで汝を護るだけだ」

「すぐ護つてみせるわ！ 貴女が望むなら、たとえ世界が敵だとしても！！」

「・・・・・取り敢えずツッコんでいいですか？」

「いや、面白にから放置で」

「レフイ様も楽しんでいらっしゃいますし」

「欠、もつ少し見てよー？」

人間三人と魔剣一人?は、空間を繋げた『窓』から笑つて二人を見ていた

10・一槍の鬼、蒼き剣閃（後書き）

感想等よろしくお願ひします。

蒼命「私ネタキャラになりたくないのだけれど？」

水霧「ねたぐしてもねたしても私になるから分かり辛いなあ」
蒼命「わたくしは!! ネタキャラ化反対よ!!」

水霧 - ふんへえ、みんなそこ思ってるかな
・・・・・
ねえみん

追い詰められた蒼命！彼女の運命は如何に！？
次回後書きにて「乞うご期待！」

11・白を想う欠けた月（前書き）

どうも鍔姫水霧です。

11話目にしてPV数が一万を越えた様です。ありがとうございます！

．．．．と、言う訳で、下手な挿し絵の頻度が上昇します。

「レフイ様～どうですか～？」

「うーん・・・・・・もおちょい内側～」

実際に気持ちいい・・・・・・妖魔と言えども肩は凝る。

双槍は扱いが非常に難しく、伐那の身体能力を得た状態でも身体や感覚が伐那になっている訳では無いので、僕にはまだ使いこなせていない武器なのだ。慣れない武器を使えば身体への負担は大きくなるが双槍はその幅が広く、決して僕も戦闘で使えない程扱えてない訳では無い。ただ、二つの槍を手足の如く自由自在に振り回す所まで出来ていないので僕と伐那との決定的な差だ。

まあその伐那も肩凝りに悩んでいたので、これは双槍使いの宿命なのである。

ちなみにここは小さめの一軒家のリビング。見張り当番の永夜と永夜について行つた欠と満はおらず、今は妖怪のみの空間になつてい

たりなかつたり。

そして僕の肩を揉んでいるのは、ルヴィでは無く蒼命である。

「ん～～～、やつぱり刀鍛冶の手は違つね

「いやあ勿体無いお言葉ですわ」

「．．．．．レフィルカ、ルヴィさんが部屋の隅で体育座りして
るぞ」

不意に聞こえた男性の声に、脱力していた身体がビクリと反応した。

「欠！？　．．．．．いきなり背後から話しかけないでよー！」

「いや、割と慎重に話しかけたんだが

感情を抑えきれず、思わず僕は凄い勢いで立ち上がった。

慎重に？　一体あれのどこが慎重なんだ。1mも慎重さんか感じなかつた。

．．．．．少しは考えて欲しい、好きな人にいきなり背後から声なんて掛けられたら心臓が破裂どころか大爆発だ。それも半径2kmは消し飛ぶ程の。

「…………まあ、俺も悪かった…………」「めんレフ
イ」

「…………かける…………」

> 38031 — 3476 <

またしても不意に、欠の手が僕の頭を撫でた。
それはまるで全身が温まつしていく様な、言葉では言い表せない気分
だった。

心臓の鼓動は激しくても、心は考えられないほどに安心していた

「じゃなくて……ルヴィ？」

「私より蒼命の方が良いんでしよう…………私は黙になりましたよ…………」

「…………こりはまずい。ルヴィからじす黒い負のオーラ
が…………まずい…………」

「…………俺は永夜さんの手伝いに戻る」

「あ、ちょっと欠…！…………ルヴィ、別にそういう訳じゃ」

「いや分かってますよ、一萬年以上…………一萬一千百六十八年になりますか…………その間私はレフイ様と共に生きて仕えてきました。でも結局はその絆も蒼命と一日で紡げる程度のものだったんですね…………」「

ぬぐぐ…………欠許さない。混沌能力で理解不能恐怖体験の刑に処す。

…………今はそれよりルヴィだ。

悪化を予測して無口になつた蒼命。流石学問の象徴である梟だと思う。ちなみにこの状態のルヴィを再起させる方法は割と簡単である。

「…………ルヴィ！一萬年と二千年前から愛してるーー！」

「…………レ、レフイ様ーー！」

嬉し涙を流しながら、満面の笑みで僕に飛び込んでくるルヴィ。僕は相手がルヴィならこの小さなといつよりは無い胸でいつでも受け止める。

百合ではない。僕には欠がいる。大事な事なので二回言つ。百合ではない！！

「…………やはり私はついて行けるか心配ですわ」

蒼命の冷たい視線と呆れた声なんて知らなかつた事にした。

「…………ふう…………死ぬかと思つた…………」

「…………」

家の外に出て、俺は大きく深呼吸した。…………心臓が爆発しそうだ。

…………まだレフイの髪の感触が右手に残つていて。

俺の太く固い髪とは全く違う、細く柔らかいサラサラとした女性の髪だった。

「どうしたの、顔真っ赤だけど？ 口論で跡形もなく惨殺された？」

「…いや違いますよ永夜さん」

「へえ。じゃあ何？」

「それは…」

永夜さんは意地悪だ。分かつてゐるのに知らない振りして俺の反応を楽しむ…

「…分かつてるよ、レフィでしょ？ まあかわいいからね」

…そろそろ、永夜さんだけになら話しても良いだらう。
永夜さんは頭が良いし、努力を知つていて分天才よりも人の心が解る人だ。

「俺は…俺は、俺は、レフィルカと俺じゃあ釣り合わないと思つんです。

レフィルカは強くて可愛くて、妖怪だから永い時を生きていける…

・・・・・俺はあいつと比べたら弱いし不細工だし、人間だから寿命も短い。

・・・・・時々考えるんです。俺とレフイが逆の立場だつたら、俺がレフイを護れるぐらい強くてレフイより寿命もずっと永かつたらどうするか・・・・・俺は多分こうすると思います。レフイの寿命が訪れたら、共に自分も死んでしまう・・・・・あいつにはそうなつて欲しくない、俺が死んでも生きて欲しい。レフイの事は好きです。だからこそ俺はこれ以上親密になりたく無い・・・・・

「・・・・・バカヤローーー！」

突然、頬を殴られた。靈力のしつかりとこもった、重い拳だつた。為す術もなく倒れた俺に、永夜さんは珍しく怒った表情で一言だけ言った。

「そんな理由で好きな人に振られたら、お前はどんなに苦しいと思う！」

永夜さんは無表情に戻つて、元居た見張り場所へ歩いて行つた。

俺は初めて、己の愚を悟つた

11・白を想つ欠けた月（後書き）

感想等よろしくお願ひします。

蒼命「にゃー、私はレフイ様の忠実な犬です「にゃ」

水霧「猫メイド梟犬！」

永夜「…………なんかゲスト参加させられた。おすわり」

蒼命「にやつ！」

水霧「お手」

蒼命「にゃん！」

永夜「耳と尻尾が犬で手と鳴き声が猫、ネックレスと翼が梟みたいだね」

水霧「その通り。メイド服は翼と尻尾も考えてある」

蒼命「肩を揉みましようかにゃ？」

水霧「よろしく～…………うん、レフイが褒めるだけある」

永夜「…………それより、私の扱いがやけに良くて怖いんだけど」

水霧「えっ！？ ちょっと待つ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6799v/>

東方和想白魔

2011年12月31日16時54分発行